

忘れえぬ人々

国木田独歩

青空文庫

たまがわ
 多摩川の二子の渡しをわたつて少しばかり行くと溝みぞ口とい
 う宿場がある。その中ほどに亀屋かめやという旅人宿はたごやがある。ちようど
 三月の初めのころであつた、この日は大空かき曇り北風強く吹い
 て、さなきだにさびしいこの町が一段と物さびしい陰鬱いんうつな寒そ
 うな光景を呈していた。昨日降きのうつた雪がまだ残つていて高低定ま
 らぬ茅屋根わらやねの南の軒先からは雨あまだれ滴が風に吹かれて舞うて落ちて
 いる。草鞋わらじの足痕あしあとにたまつた泥水にすら寒さやそうな漣なみが立つてい
 る。日が暮れると間もなく大概の店は戸しを閉めてしまつた。闇くらい
 ひとすじまち
 一筋町がひっそりとしてしまつた。旅人宿はたごやだけに亀屋の店の障し
 ようじ
 子には燈火あかりが明あかく射さしていたが、今宵こよいは客もあまりないと見え

て内もひっそりとして、おりおり雁頸がんくびの太そうな煙管きせるで火鉢ひばちの縁ふちをたたく音がするばかりである。

突然だしぬけに障子をあけて一人ひとりの男がのっそり入はいッて来た。長火鉢に寄よつかかッて胸算用むなさんように余念あつちもなかつた主人あるじが驚おどいてこちらを向むかく暇ひまもなく、広い土間どまを三歩みあしばかりに大股おおまたに歩いて、主人あるじの鼻先はなに突つつたツた男は年ごろ三十にはまだ二ツ三ツ足らざるべく、洋服きやはん、脚絆わらじ、草鞋なの旅装なりで鳥打ち帽をかぶり、右の手に蝙蝠傘こうもりを携もえ、左に小さな革包かばんを持ってそれをわきに抱かかっていた。

『一晩厄介あつちになりたいたい。』

主人あるじは客みの風采かぜを視みていてまだ何とも言いわない、その時奥こうで手の鳴なる音ねがした。

『六番でお手が鳴るよ。』

ほえるような声で主人は叫んだ。
あるじ

『どちらさまでございます。』

あるじ

主人は火鉢に寄っかかたまままで問うた。客は肩をそびやかに
てちよつと顔をしがめたが、たちまち口の辺に微笑をもらして、
ほとり ほほえみ

『僕か、僕は東京。』

『それでどちらへお越しでございますナ。』

『八王子へ行くのだ。』

と答えて客はそこに腰を掛け脚絆きやはんの緒ひもを解きにかかった。

『旦那、東京から八王子なら道が変でございますねエ。』

あるじ

主人は不審そうに客のようすを今さらのようにながめて、何か

言いたげな口つきをした。客はすぐ気が付いた。

『いや僕は東京だが、今日東京から来たのじやアない、今日は晩おそくなくて川崎を出発たつて来たからこんな暮れてしまったのさ、ちよつと湯をおくれ。』

『早くお湯を持って来ないか。へエ随分今日はお寒かつたでしよう、八王子の方はまだまだ寒うございます。』

という主人あるじの言葉はあいそがあつても一体ふたの風つきはきわめて無ぶ愛嬌あいぎようである。年は六十ばかり、肥満ふとつた体軀からだの上に綿わたの多い半はん纏んでんを着ているので肩からじきに太い頭が出て、幅ふくぶくの広い福々

しい顔まなの目じりが下がっている。それでどこかに気むずかしいところが見えている。しかし正直やじなお爺さんだなど客はすぐ思った。

客が足を洗ッてしまッて、まだふききらぬうち、主人は、

『七番へご案内申しな！』

と怒鳴ッた。それぎりで客へは何の挨拶あいさつもしない、その後ろ姿を見送りもしなかつた。真つ黒な猫ねこが厨房くりやの方から来て、そツと主人あるじの高い膝ひざの上にはい上がつて丸くなつた。主人あるじはこれを知つているのかいなのか、じつと目をふさいでいる。しばらくすると、右の手が煙草箱たばこいれの方へ動いてその太い指が煙草を丸めだした。

『六番さんのお浴湯ゆがすんだら七番のお客さんをご案内申しな！』
膝の猫がびつくりして飛び下りおりた。

『ばか！ 貴様きさまに言つたのじやないわ。』

猫はあわてて厨房くりやの方へ駆けて行ってしまった。柱時計がゆるやかに八時を打った。

『お婆ばあさん、吉蔵が眠そうにしているじゃあないか、早く被中あなか炉かを入れてやってお寝かしな、かわいそうに。』

主人あるしの声の方が眠そうである、厨房くりやの方で、

『吉蔵はここで本を復習さくらつしていますじゃないかね。』

お婆ばあさんの声らしかった。

『そうかな。吉蔵もうお寝よ、朝早く起きてお復習さくらいな。お婆さん早く被中あなか炉かを入れておやんな。』

『今すぐ入れてやりますよ。』

勝手の方で下婢かひとお婆さんと顔を見合わしてくすくすと笑った。

店の方で大きなあくびの聲がした。

『自分が眠いのだよ。』

五十を五つ六つ越えたららしい小さな老母が煤くすぶつた被あ中ん炉かに火を入れながらつぶやいた。

店の障子が風に吹かれてがたがたすると思うとパラパラと雨を吹きつける音が微かすかにした。

『もう店の戸を引き寄せて置きな、』と主人あるじは怒鳴つて、舌打ちをして、

『また降つて来やあがつた。』

と独ひとりごと言ことのようにつぶやいた。なるほど風が大分だいぶん強くなつて雨さえ降りだしたようである。

春先とはいえ、寒い寒いみぞれ霰まじりの風が広い武蔵野むさしのを荒れに荒れて終よもすがら夜、真まつ闇くらな溝みぞの町のそのくち上をほえ狂った。

七番の座敷では十二時過ぎてもまだランプが耿こうこう々と輝いている。亀屋で起きている者といえはこの座敷の真ん中で、差し向かいで話している二人の客ばかりである。戸外そとは風雨の声いかにもすさまじく、雨戸が絶えず鳴っていた。

『この模様では明日あしたのお立ちは無理ですぜ。』
と一人が相手の顔を見て言った。これは六番の客である。

『何、別に用事はないのだから明日あした一日くらいここで暮らしてもいいんです。』

二人とも顔を赤くして鼻の先を光らしている。そばの膳ぜんの上に

は煖陶かんびんが三本乗つていて、杯さかずきには酒が残っている。二人とも心地よさそうに体からだをくつろげて、あぐらをかいて、火鉢を中にして煙草を吹かしている、六番の客は袍かいまき巻そでの袖から白い腕ひじを臂ひじまで出して巻煙草の灰を落としては、喫すつている。二人の話しぶりはきわめて卒直であるものの今宵こよい初めてこの宿舎やどで出合つて、何かの口緒いとぐちから、二口三口襖ふすまご越こしの話があつて、あまりのさびしさに六番の客から押しかけて来て、名刺の交換が済むや、酒を命じ、談話はなしに実が入つて来るや、いつしか丁寧な言葉とぞんざいな言葉とを半混ぜに使うようになったものに違いない。

七番の客の名刺には 大津弁二郎おおつべんじろうとある、別に何の肩書きもない。六番の客の名刺には秋山松之助とあつて、これも肩書きがな

い。

大津とはすなわち日が暮れて着いた洋服の男である。やせ形な、
すらりとして色の白いところは相手の秋山とはまるで違っている。
秋山は二十五か六という年輩で、丸く肥えて赤ら顔で、目元に愛
嬌いきようがあつて、いつもにこにこしているらしい。大津は無名の
文学者で、秋山は無名の画家で不思議にも同種類の青年がこの田
舎なかの旅はたご宿やで落ち合ったのであつた。

『もう寝ようかねエ。随分悪あつこう口も言いつくしたようだ。』

美術論から文学論から宗教論まで二人はかなり勝手にしやべつ
て、いま現今の文学者や画家の大家を手ひどく批評して十一時が打つ
たのに気が付かなかつたのである。

『まだいいさ。どうせ明日はだめでしようから夜通し話したってかまわないさ。』

画家の秋山はにこにこしながら言った。

『しかし何時いくじでしょう。』

と大津は投げ出してあつた時計を見て、

『おやもう十一時過ぎだ。』

『どうせ徹夜でさあ。』

秋山は一向平気である。杯を見つめて、

『しかし君が眠けりやあ寝てもいい。』

『眠くはちつともない、君が疲れているだろうと思つてさ。僕は今日きょう晩わそく川崎を立て三里半ばかりの道を歩いただけだから何と

もないけれど。』

『なに僕だつて何ともないさ、君が寝るならこれを借りていつて読んで見ようと思うだけです。』

秋山は半紙十枚ばかりの原稿らしいものを取り上げた。その表紙には『忘れ得ぬ人々』と書いてある。

『それはほんとにだめですよ。つまり君の方でいうと鉛筆で書いたスケッチと同じことおんなで他人ひとにはわからないのだから。』

といっても大津は秋山の手からその原稿を取ろうとはしなかった。秋山は一枚二枚開あけて見てところどころ読んで見て、

『スケッチにはスケッチだけのおもしろ味があるから少し拝見したいねえ。』

『まあちよつと借して見たまえ。』

と大津は秋山の手から原稿を取つて、ところどころあけて見ていたが、二人はしばらく無言であつた。戸外そとの風雨の声がこの時今さらのように二人の耳に入つた。大津は自分の書いた原稿を見つめたままじつと耳を傾けて夢心地ゆめごちになつた。

『こんな晩は君の領分だねエ。』

秋山の声は大津の耳に入いらないらしい。返事もしないでいる。風雨の音を聞いているのか、原稿を見ているのか、はた遠く百里のかなたの人を憶おもっているのか、秋山は心のうちで、大津の今の顔、今の目元はわが領分だと思つた。

『君がこれを読むよりか、僕がこの題で話した方がよさそうだ。』

どうです、君は聴ききますか。この原稿はほんの大要あらましを書き止めて置いたのだから読んだってわからないからねエ。』

夢からさめたような目つきをして大津は目を秋山の方に転じた。『詳しく話して聞かされるならなおのことさ。』

と秋山が大津の目を見ると、大津の目は少し涙にうるんでいて、異様な光を放っていた。

『僕はなるべく詳しく話すよ、おもしろくないと思つたら、遠慮なく注意してくれたまえ。その代わり僕も遠慮なく話すよ。なんだか僕の方で聞いてもらいたいような心持ちになつて来たから妙じゃあないか。』

秋山は火鉢に炭をついで、鉄瓶てつびんの中へ冷めた煖陶かんびんを突つ込

んだ。

『忘れ得ぬ人は必ずしも忘れてかなうまじき人にあらず、見たまえ僕はこの原稿の劈頭へきとう第一に書いてあるのはこの句である。』

大津はちよつと秋山の前にその原稿を差しいだした。

『ね。それで僕はまずこの句の説明をしようと思う。そうすればおのずからこの文の題意がわかるだろうから。しかし君には大概わかつていると思うけれど。』

『そんなことを言わないで、ずんずんやりたまえよ。僕は世間の読者のつもりで聴いているから。失敬、横になって聴くよ。』

秋山は煙草をくわえて横になった。右の手で頭を支ささえて大津の顔を見ながら目元に微笑をたたえている。

『親とか子とかまたは朋友知己ほうゆうそのほか自分の世話になつた教師先輩のごときは、つまり単に忘れ得ぬ人とのみはいえない。忘れてかなうまじき人といわなければならぬ、そこでここに恩愛の契りもなければ義理もない、ほんの赤の他人であつて、本来をいふと忘れてしまつたところで人情をも義理をも欠かないで、しかもついに忘れてしまうことのできない人がある。世間一般の者にそういう人があるとは言わないが少なくとも僕にはある。恐らくは君にもあるだろう。』

秋山は黙つてうなずいた。

『僕が十九の歳としの春なかの半なごろと記憶しているが、少し体からだ軀の具合が悪いのでしばらく保養する気で東京の学校を退ひいて国へ帰る、

その帰途かえりみちのことであった。大阪から例の瀬戸内通せとうちがよいの汽船に乗つて春海しゅんかい波平なへいらかな内海うちうみを航するのであるが、ほとんど一昔も前の事であるから、僕もその時の乗合の客がどんな人であったやら、船長がどんな男であったやら、茶菓ちやかを運ぶボーイの顔がどんなであつたやら、そんなことは少しも憶おぼえていない。多分僕に茶を注ついでくれた客もあつたらうし、甲板の上でいろいろと話しかけた人もあつたらうが、何にも記憶に止まつていない。

『ただその時は健康が思わしくないからあまり浮き浮きしないで物思いに沈んでいたに違ちがいない。絶えず甲板の上に出いで将ゆくすえ来この夢を描いてはこの世における人の身の上のことなどを思いつづけていたことだけは記憶している。もちろん若いものの癖くせでそれも

不思議はないが。そこで僕は、春の日ののどかな光が油のような海面に融とけほとんど漣さざなみも立たぬ中を船の船首へさきが心地よい音をさせて水を切つて進行するにつれて、霞かすみたなびく島々を迎えては送り、右舷うげん左舷さげんの景色けしきをながめていた。菜の花と麦の青葉にしきとで錦を敷いたような島々がまるで霞の奥に浮いているように見える。そのうち船がある小さな島を右舷に見てその磯いそから十町とは離れないところを通るので僕は欄に寄り何心なにげなくその島をながめていた。山の根がたのかしここに背の低い松が小杜こもりを作っているばかりで、見たところ畑はたもなく家らしいものも見えない。しんとしてさびしい磯の退潮ひきしおの痕あとが日に輝ひかつて、小さな波が水際みぎわをもてあそんでいるらしく長い線すじが白刃しらばのように光つては消えている。無人島

でない事はその山よりも高い空で雲雀が啼ひばりいているのが微かすかに聞こえるのでわかる。田畑ある島と知れけりあげ雲雀、これは僕の老父おやじの句であるが、山のむこうには人家があるに相違ないと僕は思った。と見るうち退潮ひきしおの痕あとの日に輝ひかつているところに一人の人がいるのが目についた。たしかに男である、また小供こどもでもない何かしきりに拾かごつては籠おけか桶かごかに入れていられるらしい。一一三歩ふたあしみあしあるいてはしやがみ、そして何か拾かごつていられる。自分はこのさびしい島かげの小さな磯あさを漁あさつていられるこの人をじつとながめていた。船が進むにつれて人影が黒い点のようになってしまった、そのうち磯も山も島全体かすみが霞かすみのかなたに消えてしまった。その後きょう今日が日までほとんど十年の間、僕は何度この島かげの顔も知らないこ

の人を憶おもい起こしたろう。これが僕の「忘れ得ぬ人々」の一人である。

『その次は今から五年ばかり以前、正月元旦がんとんを父母の膝ひざもと下で祝つてすぐ九州旅行に出かけて、熊本くまもとから大分おおいたへと九州を横断した時のことであつた。

『僕は朝早く弟と共に草鞋脚わらしきやはん絆はで元氣よく熊本を出発たつた。その日はまだ日が高いうちに立野たてのという宿場まで歩いてそこに一泊した。次の日のまだ登らないうち立野を立て、かねての願いで、阿蘇山あそさんの白煙はくえんを目がけて霜を踏み栈橋を渡り、路を間違えたりしてようやく日中時分おひるに絶頂近くまで登り、噴火口に達したのは一時過ぎでもあつただろうか。熊本地方は温暖であるがうえに、

風のないよく晴れた日だから、冬ながら六千尺の高山もさまでは寒く感じない。高嶽たかたけの絶頂いただきは噴火口から吐き出す水蒸気が凝って白くなっていたがそのほかは満山ほとんど雪を見ないで、ただ枯れ草白く風にそよぎ、焼け土のあるいは赤きあるいは黒きが旧噴火口の名残なごりをかしここに止めて断崖だんがいをなし、その荒涼たる、光景は、筆も口もかなわない、これを描くのはまず君の領分だと思う。

『僕らは一度噴火口の縁ふちまで登って、しばらくはすさまじい穴のぞき込んだり四方の大観をほしいままにしたりしていたが、さすがに頂いただきは風が寒くつてたまらないので、穴から少し下りおると阿蘇神社があるそのそばに小さな小屋があつて番茶くらいはのませ

てくれる、そこへ逃げ込んで団飯むすびをかじって元氣をつけて、また噴火口まで登った。

『その時は日がもうよほど傾いて肥後の平野へいやを立てこめている霧もが焦げて赤くなってちようどそこに見える旧噴火口の断崖と同じような色に染まった。円錐形えんすいけいにそびえて高く群峰を抜く九重嶺すそのの裾野の高原数里の枯れ草が一面に夕陽せきようを帯び、空氣が水のように澄んでいるので人馬の行くのも見えそうである。天地りよう寥廓かく、しかも足もとではすさまじい響きをして白煙濛々もうもうと立ちのぼりまっすぐに空を衝つき急に折れて高嶽たかたけを掠かすめ天の一方に消えてしまう。壮といわんか美といわんか惨さんといわんか、僕らは黙ったまま一言ごんも出さないでしばらく石像のように立っていた。こ

の時天地ゆうゆう悠々の感、人間存在の不思議の念などが心の底からわいて来るのは自然のことだろうと思う。

『ところでもっとも僕らの感を惹いたものは九重嶺と阿蘇山との間の一大窪地いちだいくぼちであった。これはかねて世界最大の噴火口の旧跡と聞いていたがなるほど、九重嶺の高原が急におち頽こんでいて数里にわたる絶壁がこの窪地の西を回めぐっているのが眼下によく見える。なんたいさんろく男体山麓の噴火口は明媚幽邃めいびゆうすいの中禅寺湖と変わっているがこの大噴火口はいつしか五穀実る数千町歩の田園とかわって村落幾個の樹林や麦畑が今しも斜陽静かに輝いている。僕らがその夜、疲れた足を踏みのぼして罪のない夢を結ぶを楽しんでいる宮地みやじという宿駅もこの窪地にあるのである。

『いつそのこと山上の小屋に一泊して噴火の夜の光景を見ようか
という説も二人の間に出たが、先が急がれるのでいよいよ山を下
ることに決めて宮地を指して下りた。下りは登りよりかずつと勾
配が緩やかで、山の尾や谷間の枯れ草の間を蛇のようにうねっ
ている路をたどって急ぐと、村に近づくにつれて枯れ草を着けた
馬をいくつか逐いこした。あたりを見るとかしここの山の尾の
小路をのどかな鈴の音夕陽を帯びて人馬いくつとなく麓をさして
帰りゆくのが数えられる、馬はどれもみな枯れ草を着けている。
麓はじきそこに見えていても容易には村へ出ないので、日は暮れ
かかるし僕らは大急ぎに急いでしまいには走って下りた。』

『村に出た時はもう日が暮れて夕闇ほのぐらいころであつた。』

村の夕暮れのにぎわいは格別で、壮年男女なんによは一日の仕事のしまいに忙しく子供は薄暗い垣根かきねの陰や竈かまどの火の見える軒先に集まって笑ったり歌ったり泣いたりしている、これはどこの田舎いなかも同じことであるが、僕は荒涼たる阿蘇の草原から駆け下りて突然、この人じんかん 寰かんに投じた時ほど、これらの光景に搏うたれたことはない。二人は疲れた足をひきずって、日暮れて路遠みちきを感じながらも、懐なつかしいような心持ちで宮地を今宵こよいの当てに歩いた。

『一村むら離れて林や畑はたの間をしばらく行くと日はとつぷり暮れて二人の影がはつきりと地上に印するようになった。振り向いて西の空を仰ぐと阿蘇の分派の一峰の右に新月がこの窪地一帯の村落をわがものがお我物わがものがお顔に澄んで蒼味あおみがかった水のような光を放っている。二人

は気がついてすぐ頭の上を仰ぐと、昼間は真つ白に立ちのぼる噴煙が月の光を受けて灰色に染まつて碧瑠璃へきるりの大空を衝ついているさまが、いかにもすすまじくまた美しかった。長さよりも幅の方が長い橋にさしかかったから、幸いとその欄に倚よつかかつて疲れきつた足を休めながら二人は噴煙のさまのさまざまに変化するをながめたり、聞くともなしに村落の人語の遠くに聞こゆるを聞いたりしていた。すると二人が今来た道の方から空からぐるま車らしい荷車の音が林などに反響して虚空こくうに響き渡つて次第に近づいて来るのが手に取るように聞こえだした。

『しばらくすると朗ほがらか々な澄すんだ声で流して歩く馬子唄まごうたが空車の音につれて漸ぜんぜん々と近づいて来た。僕は噴煙をながめたままで耳

を傾けて、この声の近づくのを待つともなしに待つていた。

『人影が見えたと思うと「宮地やよいところじゃ阿蘇山ふもと」という俗謡うたを長く引いてちようど僕らが立つている橋の少し手前まで流して来たその俗謡うたの意と悲壮な声とがどんなに僕の情こころを動かしたろう。二十四、五かと思われる屈強な壯漢わかものが手綱たづなを牽ひいて僕らの方を見向きもしないで通つてゆくのを僕はじつとみつめていた。夕月の光を背にしていたからその横顔もはつきりとは知れなかつたがそのたくましげな体軀からだの黒い輪郭が今も僕の目の底に残つてゐる。

『僕は壯漢わかものの後ろ影をじつと見送つて、そして阿蘇の噴煙を見あげた。「忘れ得ぬ人々」の一人はすなわちこの壯漢わかものである。

『その次は四国の三津が浜に一泊して汽船便を待った時のことであつた。夏の初めと記憶しているが僕は朝早く旅宿を出て汽船の来るのは午後と聞いたのでこの港の浜や町を散歩した。奥に松山を控えているだけこの港の繁盛は格別で、分けても朝は魚市が立つので魚市場の近傍の雑踏は非常なものであつた。大空は名残なく晴れて朝日麗かに輝き、光る物には反射を与え、色あるものには光を添えて雑踏の光景をさらに殷々しくしていた。叫ぶもの呼ぶもの、笑声嬉々としてここに起これば、歡呼怒罵乱れてかしこにわくというありさまで、売るもの買うもの、老若男女、いずれも忙しそうにおもしろそうにうれしそうに、駆けたり追つたりしている。露店が並んで立ち食いの客を待っている。

売っている品は言わずもがなで、食つてゐる人は大概船頭船方せんどう ふなかたの類たぐいにきまつている。鯛たいや比良目ひらめや海鰻あなごや章魚たこが、そこらに投げ出してある。なまぐさい臭においが人々の立ち騒ぐ袖そでや裾すそにあおられて鼻を打つ。

『僕は全くの旅客りよかくでこの土地には縁もゆかりもない身だから、知る顔もなければ見覚えの禿はげ頭もない。そこで何となくこれらの光景が異様な感を起こさせて、世のさまを一段鮮あざやかながめるような心地がした。僕はほとんど自己おのれをわすれてこの雑踏うちの中をぶらぶらと歩き、やや物静かなる街ちまたの一端はしに出た。

『するとすぐ僕の耳に入ったのは琵琶びわの音ねであつた。その店先に一人の琵琶僧が立っていた。歳としのころ四十を五ツ六ツも越えた

らしく、幅の広い四角な顔の丈たけの低い肥えた漢子おとこであつた。その顔の色、その目の光はちょうど悲しげな琵琶の音にふさわしく、あの咽むせぶような糸の音につれて謡うたう声が沈んで濁つて淀よどんでいた。巷ちまたの人は一人もこの僧を顧みない、家々の者はたれもこの琵琶に耳を傾けるふうも見せない。朝日は輝く浮世はせわしい。

『しかし僕はじつとこの琵琶僧をながめて、その琵琶の音に耳を傾けた。この道幅の狭い軒端のきばのそろわな、しかもせわしそうな巷ちまたの光景がこの琵琶僧とこの琵琶の音とに調和しないようでした。もどこかに深い約束があるように感じられた。あの鳴咽おえつする琵琶の音が巷の軒から軒へと漂うて勇ましげな売り声や、かしましい鉄砧かなしきの音と雑まざつて、別に一道どうの清泉が濁波だくはの間を潜くぐつて流れ

るようなのを聞いてみると、うれしそうな、浮き浮きした、おもしろいような、忙しそうな顔つきをしている巷の人々の心の底の糸が自然の調べをかなでているように思われた、「忘れえぬ人々の一人はすなわちこの琵琶僧である。』

ここまで話して来て大津は静かにその原稿を下に置いてしばらく考え込んでいた。戸外そとの雨風の響きは少しも衰えない。秋山は起き直って、

『それから。』

『もうよそう、あまりふけるから。まだいくらもある。北海道歌うた志内たしなの鉞夫、大連だいにん湾頭の青年漁夫、番匠ばんしょう川がわの瘤こぶある舟子ふなこなど僕が一々この原稿にあるだけを詳しく話すなら夜が明けてしま

うよ。とにかく、僕がなぜこれらの人々を忘れることができないかという、それは憶おもい起こすからである。なぜ僕が憶い起こすだろうか。僕はそれを君に話して見たいがね。

『要するに僕は絶えず人生の問題に苦しんでいながらまた自己将来の大望たいもうに圧せられて自分で苦しんでいる。不幸ふしあわせな男である。

』そこで僕は今夜こよひのような晩ひとに独り夜ふけて燈ともしびに向かっているとこの生の孤立を感じて堪たえ難いほどの哀情を催して来る。その時僕の主我の角つのがぼきり折れてしまつて、なんだか人懐ひとなつかしくなつて来る。いろいろの古い事や友の上を考えだす。その時油然ゆぜんとして僕の心に浮かんで来るのはすなわちこれらの人々である。そうでない、これらの人々を見た時の周囲の光景の裡うちに立つこれら

の人々である。われと他と何の相違があるか、みなこれこの生を天の一方地の一角に享^うけて悠^{ゆう}々^{ゆう}たる行路をたどり、相携えて無窮の天に帰る者ではないか、というような感が心の底から起こつて来てわれ知らず涙が頬^ほをつたうことがある。その時は実に我^{われ}もなければ他^{ひと}もない、ただたれもかれも懐かしくつて、忍ばれて来る、

『僕はその時ほど心の平穩を感ずることはない、その時ほど自由を感ずることはない、その時ほど名利競争^{めいり}の俗念消えてすべての物に対する同情の念の深い時はない。』

『僕はどうにかしてこの題目で僕の思う存分に書いて見たいと思うている。僕は天下必ず同感の士あることと信ずる。』

その後二年経った。

大津は故あつて東北のある地方に住まっていた。溝口の旅宿で初めてあつた秋山との交際は全く絶えた。ちようど、大津が溝口に泊まった時の時候であつたが、雨の降る晩のこと。大津はひとり机に向かつて瞑想に沈んでいた。机の上には二年前秋山に示した原稿と同じの『忘れ得ぬ人々』が置いてあつて、その最後に書き加えてあつたのは『亀屋の主人』であつた。

『秋山』ではなかつた。

青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「国民之友」

1898（明治31）年4月

入力：土屋隆

校正：蔣龍

2009年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

忘れえぬ人々

国木田独歩

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>